

VFS-Peds

小児版バンダービルト疲労尺度

実施者のための活用ガイド



本ガイドはバンダービルト大学の Hornsby 博士の許諾のもと、英語版のガイド (https://www.vumc.org/vfs/sites/default/files/public_files/VFS/VFS-Peds%20Manual_v3.pdf) を参考に独自の項目を追加して作成しています。

Ver. 1.0(2026 年 1 月 31 日) 作成者：茨城大学 教育学野 田原 敬

小児版バンダービルト疲労尺度(VFS-Peds)を使用する前に

01 バンダービルト疲労尺度 (VFS) とは？

VFSとはバンダービルト大学のHornsby博士のグループが中心になって開発された、きき取りの負担から生じる疲労感であるリスニング・ファティーグ (LF) を評価するための質問紙です(LFに関して詳しくは[こちらの](#)リンクや右のQRコードも参照)。英語版のみでなく、さまざまな言語に対応したものが作成されており、日本語版も使用することができます。



LFについて

VFSは成人用(VFS-A)と小児用(VFS-Peds)があり、そのうち小児用は6~17歳を対象とし、①子ども用(VFS-C)、②保護者用(VFS-P)、③教師用(VFS-T)の3種類が用意されています。いずれも10問程度の質問に答えることで、LFを評価することができます。

02 VFS-Pedsの入手方法

バンダービルト大学の“Vanderbilt Fatigue Scales”のページへ行き、上部のメニューから“Pediatric Scales”を選択してください。そして“Pediatric Scales” (QRコードも参照)の下部の“Translated Pediatric Scales”という欄の中から“JAPANESE「VFS-Peds Japanese Version」”をクリックしてダウンロードしてください(本ガイドをPDFでご覧の方は[こちら](#)からも直接入手できます)。



[VFS-Peds
のページ](#)

03 VFS-Pedsを実施する際の注意点

- ① **主観的な指標であるために、その答えが絶対的なものであるとは限らない**
身体的・精神的に疲労が生じていても、それをどのように感じ取るのかには個人差があります。ここで得られる数値は絶対的なものではないため、評価の結果のみでなく日常の場面の観察や他のエピソードを入手し、総合的に評価を行いましょう。
- ② **まだ日本語版での基準値はない**
P3にて結果を解釈する際の基準値を載せていますが、これは英語版で実施した際の値なので、日本語版では数値が異なる可能性があります。現在掲載されている数値は目安とし、現時点では個人内の変化などを中心に活用していただければと思います。
- ③ **評価を行う目的をはっきりさせておく**
手軽に行える検査であるからこそ、色々試してみたいかなと思います。しかし、結果をどのように活用して、こういった課題を解決するのか、また支援に結びつけるのかという目的を明確にした上で活用していただきたいです。

リスニング・ファティーグやリスニング・エフォートは非常に曖昧で複雑な概念です。VFS-Pedsのみでなく、あらゆる情報を統合して評価し、本人も巻き込みながら一人ひとりに応じた支援を提供していく視点が重要です。

実施方法

01 VFS-Peds の尺度について

VFS は、子どもが「今この瞬間」に感じている疲労ではなく、「長期的」な疲労を評価することを目的とします。そのため回答者には、直近の1週間（あるいは直近1週間が特殊であった場合は典型的な1週間）を振り返り、その期間にどの程度の頻度でそう感じたり、そう振る舞ったりしたかを最もよく表す選択肢を選ぶよう指示します。

回答形式は、5件法（0～4）のリッカート型頻度尺度で、選択肢は以下のとおりです。

- まったくない （0）
- ほとんどない （1）
- ときどき （2）
- よくある （3）
- ほとんどいつも （4）

回答者は必ずいずれか1つを選びます。実施者は全項目に回答があることを確認してください。

02 VFS-Peds を実施する際の注意点

VFS-Peds は基本的に対象児と実施者が対面で実施することを想定しています。対象児の年齢によっては、メール・オンライン配布などの遠隔実施が適切な場合もあります。

子どもを対象に実施する際の注意点

6～10歳：この年齢層では、実施者がVFS-Cの教示と全項目を読み上げるなどして、対象の子どもに内容が伝わるように工夫してください。

11～17歳：この年齢層であっても、実施者が全ての項目を読み上げながら実施することが推奨されます。ただし、対象となる子どもの発達段階に応じて、内容を十分に理解できる場合は、単独で回答させても問題ありません。

- 実施者は、子どもが各項目をよく読み、内容を理解していることを確認してください。
- 内容理解が難しい場合は、適宜実施者が項目を読み上げるなどサポートしてください。
- 子どもが信頼できる回答をしていない可能性がある場合と実施者が判断した場合は、実施を中止してください。

03 追加の質問（全尺度共通）

どの尺度でも、回答者がいずれかの項目で「よくある」または「ほとんどいつも」を選んだ場合、実施者は「追加質問を行うべきである」とされています。これらの追加質問によって、LFに関する問題を明確にし、支援の手がかりを得ます（詳細はP4）。

結果の解釈

01 合計得点の算出

すべての版で、各項目の回答（0～4）の結果を合計して得点化します。尺度によって項目数が異なるため、満点も異なります。

- VFS-C（全10項目：満点40点）とVFS-T（全8項目：満点32点）：全項目の合計がLFの総得点となります。
- VFS-Pに関しては身体疲労（全7項目：満点28点）と精神疲労（全5項目：満点20点）の下位尺度得点をそれぞれ出します。

注意：全項目に回答がない場合（回答漏れなどがある場合）、合計得点は算出できません。

02 VFS-Peds 得点の解釈

VFS-Pedsは5件法で、LFに関連する問題が生じる頻度を測定します。0は「その問題がまったくない」、4は「ほとんどいつもある」ことを意味します。したがって、合計得点が高いほど、LFに関する問題がより頻繁に生じていることを示します。

たとえば、VFS-Cは10項目なので、合計得点が0～10点の場合は「問題があまり生じていない」こととなります。対照的に30～40点の場合は「LFに関連する問題が頻発している」ことを意味します。このような高得点の子どもの事例では、LFの問題が日常的で、学業面・心理社会面のウェルビーイングに影響が生じている可能性が考えられます。

解釈の流れ

解釈のプロセスとして、①基準（難聴やその他の障害のない子どもと、保護者・教師を対象に得た結果）と比較し、②子どもが「よくある」または「ほとんどいつも」と回答した項目について追跡して検討します。

① 基準との比較（参考値）

以下の2点のいずれかを満たしている場合は、対象児が難聴のない子どもに比べてLFの問題を抱えていることを意味します。

- 「よくある」または「ほとんどいつも」を選んだ項目数（全項目を通した合計）が3つ以上ある
- 合計得点（VFS-C・VFS-T）／下位尺度得点（VFS-P）が基準値を超えている；
VFS-C：27点以上、VFS-P：精神15点以上、身体13点以上、VFS-T：23点以上

* これらの値は英語版をもとに得られている値であり、日本語版の基準値はまだ算出されておられません（2026年1月現在）。したがって、現時点での結果をもって「難聴のない子どもと比較して疲れやすい」とは科学的にも断言できません。あくまでも参考値としてお考えください。

② 追加の質問

どの項目でも「よくある」または「ほとんどいつも」が選択された場合に、追加質問を実施することが推奨されています。①の基準との比較の結果のいかんを問わず、本人が困難を抱えている場面を特定し、それに介入すべきだからです。

それらの回答がみられた場合には、「いつ、どこで、どのように」困難さが生じるかについて、深掘りする質問を行うことが求められます。

〈具体的な質問の例〉

「注意深くきかないといけないときに、よく疲れると言ってましたね。どんな場面でそうなるか、具体的に教えてくださいか？」

「学校で、きくのをあきらめてしまうことが多い活動や時間はありますか？ きくことをあきらめるとき、実際にはどんな気持ちになりますか？ きく代わりに何をしますか？」等

03 VFS-Peds の結果を活かした支援

ここまでで得られた情報を参考にしながら、LF について問題を抱えている場合には、支援方法を本人と一緒に考えていくことが望まれます。また支援を実施してしばらくした後に、再度 VFS-Peds を実施し、その支援に効果があったのかどうか見直すことも重要です。LF の支援方法に関しては[こちらのリンク](#)か、右の QR コードの内容も参考にしてください。



LF を支援する

具体的な活用に際して(2026年1月現在)

2026年1月現在では日本での基準値がまだ定まっていないために、「難聴のない事例と比較してLFが高いことを証明する」という目的では使用することはできません。しかし、予備的な検討を通して、以下のようなことがわかってきました。

1. すべての聴覚障害児が高い得点を示すわけではない

地域の小中学校に通う聴覚障害のある児童生徒約20名程度に実施したところ、英語版の基準値を越える結果を示した事例は1/3程度でした。またその結果は聴力レベルなどに関係なく、非常に大きな個人差が確認されました。この背景には以下の2つが考えられます。

①本当にLFが生じていない：「難聴がある≠困難がある」ではなく、周囲の環境との相互作用で困難が生じます。本人の努力も含め過ごしやすい環境で学んでいるという望ましい事例です。

②LFを本人が捉えられていない：VFS-Pedsは6歳から対応可能とされていますが、特に9歳頃までは、大人がサポートしても質問項目の意図を理解できていなかったり、自己理解の未熟さも影響して自身の状況を的確に捉えることができなかつたりするようです。軽度の事例なども含め、セルフ・アドボカシーや自己理解の発達を促す自立活動的な関わりを続け、それらがある程度育ったタイミングでVFS-Pedsが本領を発揮するかもしれません。

2. 個人内の変化をみる

基準値はまだ確立されていないですが「個人内での比較」であれば問題ありません。予備的にVFS-Pedsを活用したところ以下のような結果も得られています。



事例1：軽度難聴生徒（中学生） 聴取成績が良好であるため、特に支援機器などを使わずに生活していた。支援環境（文字通訳アプリの使用）を整える前後でVFSの結果を比較したところ、支援利用後に合計得点が大きく減少し、支援を利用したことでLFが低下したことが確認された。



事例2：人工内耳装用生徒（高校生） 普段は補聴援助システムを使いながら授業を受けていたが、専門的な内容を学ぶ際の負担を減らすために、文字通訳アプリを使用した。アプリを使用する前後でVFSを行ったが、大きな変化は確認されなかった。

事例1に関しては、支援の効果を客観的に評価するうえで重要な結果が得られました。一方で事例2に関しては、アプリを使用する前から、すでに補聴援助システムの活用に加え、本人なりに様々な方略を用いてLFの軽減に努めていました。つまり、介入前の時点ですでに利用可能な対策を十分に講じていた状態であり、追加の支援を導入しても、それ以上の軽減は困難であったと考えられました。

いずれの事例においても、授業中の行動観察や本人への聞き取りも行ったところ、特にアプリなどを活用した後は放課後に活動する余裕ができた（例：友人と遊ぶ、予備校に自習しに行く等）といった発言がありました。事例1はそれが上手にVFS-Pedsに反映されましたが、あくまでも主観的な質問紙ですので、事例2のような結果もあり得るかと思います。これらからも、VFS-Pedsのみではなく、様々な情報を統合させた評価の重要性がうかがえます。

3. 評価者間でのズレをみる

VFS-Peds は本人用、保護者の代理回答用、教師の代理回答用の3種類がありますが、同じ対象児にこれら3種類を実施してみると、評価者間で結果が異なるという事例がありました。具体的には、①子ども自身はLFを感じていないが、保護者・教師はLFの問題があると評価しているパターン、その反対で②子ども自身がLFの問題を感じているが、保護者・教師がその状態に気づいていないというパターンもありました。

VFS-Peds はあくまでも主観的な評価法で、個々の感じ方が影響するために「絶対的な正解」はありません。重要なのは、評価者間でズレが出たときに、「どちらが正しい／間違っている」かを判断するのではなく、なぜそのようなズレが生じたかを考え支援に活かしていくことです。

たとえば先に挙げた①のパターンでは、「1. すべての～」で説明したとおり、対象児が自身の状況をまだ的確に把握できていない可能性もあります。②のパターンでは、対象児自身がLFの問題を訴えているので、その真偽にかかわらず、早急な対応が求められます。子どもだけでなく、大人側が適切に評価できていない可能性も考慮しつつ、様々なパターンに対応していくことが望まれます。

4. 本人や保護者・教師と対話するためのツールとして

VFS-Peds はLFを評価するという非常に有効なツールである一方で、様々な要因が結果に影響を及ぼしうるので、これで全ての問題が解決するわけではありません。予備的な実施をお願いした専門家の先生方からは、「数値自体も重要であるが、LFの問題について本人や周囲の大人と話す際の良いきっかけとなった」といった感想が得られました。実際に筆者も数人に対して実施したところ、質問項目に回答する際に「そういえばこの前…」などエピソードを話してくれることが多くありました。こうした結果を得るためのプロセスの中で、本人が保護者・教師、さらには専門家と対話するという点にもその価値があると感じています。自立活動の中でセルフ・アドボカシーや自己理解を高めるために使用するといった、教材としての活用も考えられます。ただ記入・回答を求めるだけでなく、VFS-Pedsを通じた様々なやりとりが、その後の支援のための重要な手がかりになるということを実施者は理解しておきましょう。

おわりに

今後の研究を通して、日本語における基準値の確立や、VFS-Peds活用事例の紹介などを行い、Webや論文を通じて広く紹介していく予定であります。それまでの間、それぞれの実践現場などでぜひ幅広い視点からご活用いただけると幸いです。

*本ガイド執筆のための予備的調査として、茨城県立水戸聾学校の先生方に多大なるご協力を頂きました。ご回答いただいた方々も含め、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



コミュニケーションときこえのラボ
Communication for Deaf and Hard-of-Hearing Children, Ibaraki University



[HPへのリンク](#)